



巻頭言

知識集約の幕明け

辻岡 健*

人間の欲求は無限であり、欲求を充足するための物は有限である。かつては宗教や道徳、あるいは慣習といった社会的な規範が、ややもすると独り歩きしようとする人間の欲求に歯止めをかけ、物との調和を維持する節理があった。しかし、今日の産業社会では、物的な生産力によって欲求と充足物との間のギャップを埋めようとし、巨大化した生産力は、却って欲求を刺激するばかりか拡大しようとしていっている。

このことが世界中を資源の無駄使いに追いやり、むしろ消費を美德とする価値基準を生み出すまでに人間自身を蝕んできた事態を思えば、ノストラダムスの予言が当たろうと当たるまいとにかかわらず、かなり危険な道を歩んできたといえる。

オイルショックを最も痛烈に浴びたわが国が、資源多消費型産業から革新的技術要素を取り入れた知識集約産業へ、その産業構造の転換を図ろうと動き出したことは当然であるばかりか、資源の乏しいというより全くないといった方がよいわが国の生命線を築く上での真剣な課題でもある。いわば“有限社会”への自覚を今ほど望まれるときはなく、わが国をして世界の“ゴミ捨て場”から解放するためにもこの産業転換を成し遂げなければならぬ。もとより、現在の産業社会は複雑に絡みあい、巨大な運動量をもって走り続けてきたため、すべてに急速な方向転換は望みうべくもないが、ただひたすらに、これまでも知識と頭脳の集約に努めてきた情報処理技術を中心とした情報産業をこそ、より健全、強固なものとするのが望まれよう。

しかし、電子工業がわが国産業の重点と目され、情報処理技術がその生命線といわれてから久しいが、依然として抵抗力がなく不景気のために塗炭の苦しみに喘いでいる。もとよりわが国コンピュータ産業は、誕生以来、政府による手厚い保護を受けながら、それなりの成長を遂げてはきたが、その根幹をなす技術、ハイアラキのみならず、生産機械すらを米国の輸入に

依存する風潮を考えれば、現下の状態もむしろ当然といわねばなるまい。知識集約産業は、その産業で生産したソフトウェアがその生産物の主体であるべきであって、ソフトウェアのほとんどを導入に頼り、ハードウェアのみを製造する形式の産業は、一見知識集約型にみなされても素材加工に過ぎず、開発途上国の労働集約型産業となら変わるべきところがない。

資源型産業、労働型産業、キャピタル型産業、いずれをとっても経験の蓄積、無数の研究成果によって発展を遂げており、この種の技術開発力を自己にもたなければ、いかに規模大きく複雑なものであっても、労働集約産業といわねばなるまい。

「コンピュータ技術は未だ生れて日が浅く、したがって日進月歩の技術である」とよくいわれ、先進国技術の無作為導入といった過ちを生む経過となつたのであるが、かくなるときこそ自主技術の蓄積と確立が望まれるのである。彼の地の技術を追う余りに、独自の発想をベースとした基礎技術の探究、醸成がおろそかになるばかりか、先行技術とのコンパティビリティが制約となって革新を阻害することさえ起っている。

知識集約産業としてコンピュータ産業を位置づけるためには、基礎研究の充実が何にもまして重要となつてこよう。すでに応用研究においてインタディスプレイナリなアプローチが提唱されて久しいが、基礎研究においてより肝要となり、特に、基礎と応用の連繫研究、いわば“産学協同体制”的研究を忍耐強く重ねることが望まれよう。

わが国コンピュータ技術は、その歩んできた道程において、早や揺らぐ期は終えた。わが国の情動的土壌に適した技術に開発すべき多くが取り残されているし、これらを解決する過程において未踏技術の究明につながるものも多かるう。虚心坦懐に、わが国コンピュータ技術ならびに産業の位置づけとあるべき姿を改めて考え、今後のわが国産業社会の発展に寄与したいものである。

(昭和50年7月10日)

* 本会前常務理事 日本電信電話公社 熊本電気通信部長